

わたしという宇宙

[マタイによる福音書 10章 26～33節]

「人々を恐れてはならない。覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである。わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。二羽の雀が一アサリオンで売られているのではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。だから、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言い表す。しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言う。」

[1] 私とは何者か

今日の聖書の箇所は、その前からの続きで、**信仰者への迫害**というイエス様のお話の中で語られている言葉です。誰も迫害を喜ぶ人はいないでしょう。もしそのような時代となったとして、真っ先に目をつけられるのは**私たち**です。このように教会に集まることによって、イエス様の言葉を借りれば、私たちが**イエス様の「仲間」**(10:33)であることを証しているのですから。私たちが礼拝を捧げるということは、単なる習慣ではありませんね。それは一つの生きざまと言ってもいいことです。どんな生きざまかと言うと、「**体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れ**」ない生き方です。そんな大それたことじゃないとおっしゃるでしょうか？いいえ。これは凄いことだと思うのです。—この体が滅んだとしても、私の魂は誰も殺すことは出来ないのだ、なぜなら、体も魂も本当に滅ぼすことが出来る方が私の味方だから—。この私は「**見かけ上の私**」が私なのではなくて、もっと大きくて深い、「**肉眼を超えた私**」がある。その私を本当に愛し、死の先まで愛してくれる方がいるということを私たちは深い所で知っているからこのように礼拝を捧げているのではないのでしょうか。これは、私たちの“生き方”です。

[2] 「恐れ」の中で、主と共に

「**恐れてはならない**」。或いは「**恐れるな**」。—今日の短い段落の中で 3 回もイエス

様はおっしゃっています。これは、イエス様は私たちが**すぐに恐れの中に引きずられてしまうか**をよ〜くご存じだからだと思います。これは有難いことです。イエス様は私たちの「**恐れ**」の中に入り込んで下さることが出来る方なのです。あの嵐のガリラヤ湖の物語もそうですよね。イエス様は弟子たちと一緒にあって突然の嵐を経験されているのですね。イエス様は居ないのではなのです。それどころか聖書を見ると（8章）イエス様が率先して舟に乗りこまれたと書いてある。「イエス様一緒にいて下さるのにどうしてこんなことが起こるのですか」と私たちはついつい言いたくなってしまいます。けれどもそうではなく、「こんな恐ろしく、なす術なく沈没してしまいそうな嵐の現実の中にもあなたは居て下さるのですね」と言うのが信仰だと思います。「**インマヌエル**」(主、共にいます)というのは、平時の中では私たちはその事実を見失ってしまいますけれども、私たちの恐れが極まる時、孤独を感じる時にこそ分かって来ることなのではないでしょうか。

ところで、「**迫害**」ということですが、考えてみるとこれは全く意味のない行為だと思います。どう考えてもこれは迫害する側の方が追い詰められているのです。したくないことをするのですから。迫害しないと自分が仕打ちを受けるから迫害するのです。全く愚かな行為です。ヘロデ王が良い例ですよね。「新しい王」が現れたら自分が失脚するから2才以下の男子を殺しました。全く平安がないのです。「**体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。**」とありますけれども、聖書は、この世の権力者のことで恐れる必要など何もないよ。それは“**魂を殺すことのできない者ども**”とイエス様は言うのですね。たとい、あなたが迫害を受けても、**あなたの「魂」は守られているのだ、とおっしゃっているのです。**迫害は、まず迫害する側が「**恐れ**」に捕われている。動揺しているのです。イエス様はそれを見抜いているのですね。

[3] 「天地創造」の前に、キリストにあつて

では、どのように神様は私たちを守っておられるのでしょうか。29節から31節にこうありました。「**二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。**」この御言が好きな人は多いと思います。「**一羽の雀さえ主は守り給う**」という美しい讚美歌もここから作られました。二羽でやっと1アサリオン（500円ほど）で売られている雀の一羽も、**神様のお許しがなければ地に落ちることはない。**それはまたさらに、**神様の眼差し**というのは**私たちの自己認識を超えている**ということも言っています。誰が髪の毛の一本一本まで数える人がいますか？ いないですよ。自分でも把握できない自分、自

分自身からも隠された自分。その所までも神様の目は届いているとイエス様はおっしゃっています。

私も最近、週に一回位ですが、赤ちゃんに会いに行くのが本当に楽しみです。娘の子供で、やっと 8 ヶ月になった女の子で、でもハイハイもいつの間にか覚えてしまって母親も目が離せなくなり、大変のようですが、けれどまだ言葉は、日本語以前と言うか、日本語以上と言うか、そういう言葉ですけれども、反応がとても面白いですね。泣き声もありますけれども、一緒にいると「オー」とか「アー」とか、何かとても深い所から発せられる長い声を出すことがあって、そういう時はとっても嬉しそうなのです。私などは何かそういう姿を見るだけで感動してしまいます。赤ちゃんはそういう自分が赤ちゃんの時のことは全く覚えていない訳ですよ。でも本当に安心して、周りの者たちの愛に包まれて、自由に時を過ごしている。それはとても「幸い」ですよ。私もそういう時があったのだと思いますけれども、勿論記憶はないのです。でもそれが「原点」なのです。

私たちって、自分の原点というのは、自分自身というものを超えているのです。 「髪の毛までも一本一本数えられている」とイエス様おっしゃいましたけれども、現代で言うなら、私を構成している最小の単位、細胞であるとか、微生物であるとか、バクテリアであるとか、そこにまで神様は目を注がれている、ということだと思います。「わたし」という存在は、一つの宇宙なんですね。宇宙を誰も造ることが出来ないように、私たちの存在も自分で造ることなど出来ない、神様の創造の業なのです！

ただ、私はひとつ引っかかることがありました。イエス様は「あなたがたはたくさんの雀よりもはるかにまさっている」とおっしゃるのですが、本当ですか？ と思うことはないでしょうか。鳥を見て、私たち、いいなあと思うこともあるのではないのでしょうか。翼があつて、自由に羽ばたけて。それに雀は「ああ、もう雀をやめたくなつた」と絶望することもないでしょう。…けれども私はハッと思ったのです。この「はるかにまさっている」というのは、イエス様が「人」となって下さつたということではないかと。神様は、この弱い私たち、罪の中、また孤独の中に引きずり込まれてしまう私たちを、本当に愛して、私たちがそっぽを向いているのに愛して、丁度多くの場合、赤ちゃんが何も覚えていないけれども愛に包まれて成長するように、私たちが求める先に、神様はその独り子を通し、十字架という形で、私たちが「一羽さえも地に落ち」ないように、滅びないように、その愛を示して下さつたのです。だから「あなたがたは鳥よりも価値あるものではないか」(マタイ 6:26)とおっしゃつたのだと思います。これは、私たちが素晴らしいとい

うよりも、**主の尊い愛の犠牲の故**に言える言葉ではないでしょうか。

そう思うと、今日の招きの聖句でお読みした言葉は、凄いことを語っていると思います。「わたしたちの主イエス・キリストの父である神はほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。天地創造の前に、神は私たちを愛して、ご自分の前で聖なるもの、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。」(エフェソ 1:3~4)

パウロは、このちっぽけな自分という存在は—そして、今このように礼拝を捧げているお互いは—この天地の全てを創造された方が、その創造に先立って、私をキリストにあって選び、命を注がれ、祝福の中で造って下さった存在なのだと
言っていると思います。私たちは、神様の目に、独り子の命を捧げても惜しくないほどの、**宇宙全体に匹敵するほどの存在**なのですね。本当に驚くべきことです。こんなスケールの大きな主の愛の中で、**今日も赦され、生かされている。「だから、恐れるな」**。何度でもこの主の愛の招きを聞いて行きましょう。私たちは今、イエス様に「**仲間**」と呼ばれているのです！

お祈り致します。